

愛知県立芸術大学美術学部陶磁専攻と 音楽学部作曲コースによる合同授業の実践報告

Practical Report on a Joint Class by the Ceramics Course of the Faculty of Fine Arts and the Composition Course of the Faculty of Music at Aichi University of the Arts

成 本 理 香 ・ 長 井 千 春
NARIMOTO Rica, NAGAI Chiharu

This is a practical report of a joint class between the Ceramics Course of the Faculty of Fine Arts and the Composition Course of the Faculty of Music at Aichi University of the Arts. This class started in 2022 after about two years of preparation. It was given to junior students of both majors for six weeks in the second semester as part of the required "Ceramics Practice III" and "Composition Theory IIIB" classes. The purpose of this program was not to superficially and passively create works influenced by other genres, but to delve deeply into ceramic and compositional works as sources of inspiration, and to complete each work in dialogue and contact with the creator. In order to realize the purpose, all the students worked in pairs (ceramics student and composition student). Our university is not a college of fine arts or a college of music, but a "university of the arts" with two faculties, and both faculties are located on the same campus, making it easy for paired students to contact each other, and above all, allowing faculty members to collaborate on tasks near each other across faculties. It is a class that was realized only at this university, taking advantage of the various assets of this university. This paper reports on the details of this joint class and its effects on students' learning and production.

1. はじめに

本稿は、令和3年度に実施された愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科陶磁専攻3年生と同大学音楽学部音楽科作曲専攻作曲コース3年生による合同授業についての報告である。担当教員は陶磁専攻教授長井千春、作曲コース准教授成本理香で、授業は共に必修の「陶磁実技 III」と「作曲理論 III」である。本学ではこれまでも、教員学生問わず、個人やグループで、美術学部と音楽学部による協働は行われており、それらの作品発表や、芸術講座がしばしば開催されてきた。しかし、今回の合同授業は各専攻のシラバスにも記載され、また、それぞれ成績も出すという、完全にカリキュ

ラムに則る授業として実施されたことが特筆すべき点である。作曲は音楽学部の中で唯一「創造する」コースであり、「創る」という点において美術と作曲には共通点があると言える。その一方で、美術では目に見えるもの、触れられるもの、つまり物体そのものを作り出すことが多いが、作曲で作られるのは基本的には目に見えず、触れることもできず、「時間」を扱うものであるという相違点がある。また、作曲において他ジャンルから何らかの影響を受けて、またはヒントを得て作曲するということは、特に珍しいことではなくなっており、実際に本学の学生たちも様々なジャンルからインスピレーションを得て作曲することが多い。陶磁分野の学生たちの創作においても同様である。

ここでは、具体的な授業内容を示しながら、この授業がめざしたもの、そして授業の結果得られたものを報告する。

2. 課題内容と授業計画

授業の内容と、そこで行う課題の内容について、令和3年度のスタートを目指して、令和元年より長井と成本によりミーティングが開始された。一過性のイベントとして行うならば、集中的に準備して1度きりの企画をワークショップのような形式で実施すれば良かっただろう。しかし、この企画は「合同授業」として、シラバスに掲載し成績にも反映するものなので、かなり詳細な事前打ち合わせが必要であった。

前述のように、これまでも美術学生と音楽学生がコラボレーションして一緒に作品を作る例はあり、課題内容もそのような形式にする、グループワークで制作するなど、様々な案が出た¹。特に、約10年前実際に陶磁の学生の作品を使用したシアターピース²を作曲の学生が作り上げた実績もあり、異なる専攻の学生同士で共に何かを制作するのは意義のあることに思えた。しかし、話し合いを続ける中で、授業の時間的な制約や期間、また、各学生のそれぞれの専門分野の技術や思考を深めていこうとする場合は、もう少し基礎的な課題の方が相応しいという結論に至った。

一つの方向性として決まったのが「陶磁学生は作曲学生の作品にインスパイアされて陶磁作品を制作し、作曲学生は陶磁学生の作品にインスパイアされて作曲する」というものである。実際の流れは、表1のように、創作が連鎖する方法をとることにした。また、実施初年度ということもあり、音楽をテーマに制作を行ったことのある陶磁の大学院生と、セラミック作品からインスパイアされて作曲したことがある作曲の大学院生にもこの授業に参加してもらった。

打ち合わせで成本が陶磁棟を訪れ、陶磁学生が2年次の基礎課題として必ず全員が制作する「30個課題（図1）」を観た時、この課題作品からは時間の流れというものを感じやすく、音楽作品への応用の入り口として適していると考え、陶磁学生の最初の作品が決まった（大学院生は別作品）。作曲学生は、これまでに創作した作品のうち、録音またはビデオが既にあるもので、あまり長すぎない曲を用意することとした。

表 1：課題の内容と流れ

| | 陶磁学生 | 作曲学生 |
|-----------|---|---------------------------------|
| 最初に用意する作品 | 陶磁作品 A：30 個課題（基礎課題） ³ (図 1) | 作曲作品 A:旧作(録音またはビデオのあるもの) |
| 課題 1 | 作曲学生の作曲作品 A を基にして 陶磁作品 B を制作 | 陶磁学生の陶磁作品 A を基にして 作曲作品 B を作曲 |
| 課題 2 | 作曲学生の作曲作品 B を基にして 陶磁作品 C を制作 | 陶磁学生の陶磁作品 B を基にして 作曲作品 C を作曲 |



図 1：30 個課題（制作：安達充徳）

美術学部と音楽学部では、それぞれのカリキュラムに沿って時間割が組まれているため、合同授業を実現するためには、調整すべき課題が数多くあった。陶磁実技 III は月～金の 1・2 限に対して、作曲理論 III は水曜日 2 限に固定されているため、基本的に水曜日 2 限を中心に合同授業を実施することにした。スケジュールは表 2 の通りである。

表 2：スケジュール

| | | |
|-----|----------------------|---|
| [1] | 7月 21 日 | ブレ授業 合同授業のガイダンス 学生の組み合わせ決定 自分のこれまでの作品について、プレゼンテーション 【課題 1】それぞれのペアの相手の作品からインスピレーションを得て、 11 月までにそれぞれ作品の制作、作曲 |
| [2] | 11 月 1 日 | 陶磁学生のための作曲概論（担当：成本） |
| [3] | 11 月 10 日 | 【課題 1】の作品発表、プレゼンテーション 【課題 2】それぞれのペアの相手が発表した作品から再度インスピレーションを得て、12 月 1 日までにそれぞれ作品の制作、作曲 |
| [4] | 11 月 17 日 | 作曲学生のための陶磁概論（担当：長井） |
| [5] | 12 月 1 日 | 【課題 2】の作品発表、プレゼンテーション |
| [6] | 12 月 8 日 | 作品発表方法について話し合い |
| [7] | 2 月（後に開催は 4 月に変更された） | 成果発表（展覧会とコンサート） |

一口で「制作する」と言っても、陶磁、作曲ともに作品の成形終了直後、作曲終了直後に発表をするのは難しい。課題 1 の作品発表は、最初の作品交換から約 3 ヶ月強の時間があるため、発表は可能であったが、課題 2 の作品発表は、制作開始から発表までの期間が 3 週間しかなく、困難なプロセスとなった。例えば、陶磁分野の場合、着想から素材を用いた成形、そして作品の完成までには、「仕上げ（装飾など）」「乾燥」「素焼き」「絵付け」「釉薬掛け」「本焼き」等、それぞれ日数を要する必須工程があり、制作開始から本焼きまでを 3 週間で仕上げるのは非常に困難である。また、

作曲の場合も、曲が完成した時点で、作品自体は確かに仕上がっているのだが、ペアの相手に提示するためには実際の演奏もしくは演奏が録音された状態でなければならない。完成後「演奏者探しと演奏の依頼」「演奏者による譜読み」「数回のリハーサル」「録音」という手順が必要で、こちらも3週間以内での実施は難しい。そこで、お互いに作品を交換する際には、陶磁作品は本焼成前の状態、作曲作品はコンピュータのデモ音源、または自作自演等の状態でも良いこととし、完全な完成作品は、課題終了後の成果発表会で披露することになった。

この課題の制作では、表面的かつ受動的に他ジャンルから影響を受けた作品を作るのではなく、発想の源となる陶磁作品、作曲作品に深く切り込み、制作者同士が対話しながら、それぞれが作品を仕上げることを目指した。本学が美術、音楽の単科大学ではなく「芸術大学」であり、さらに、同じ敷地内に両学部が隣接していること、つまり発想の源になる作品の作り手が、近くの校舎で創作しているという環境を利点として、制作途中にお互いを訪ね合ったり、メール連絡等を通じて密にコンタクトを取ったりすることを推奨した。

また、相手の作品に深く切り込むと言っても、理解が表面的なものにならず、その背景にあるものも理解できるよう、長井、成本がそれぞれ担当して「作曲学生のための陶磁概論」「陶磁学生のための作曲概論」という講義も行うこととした。

3. 授業の実施

この項では、表1と表2に沿って実際の授業内容について記す。

[1] 7月21日「プレ授業」

実際の合同授業は、11月から12月にかけて実施される。その前に、前期7月後半にガイダンスと顔合わせを兼ねたプレ授業を行い、両専攻の学生のペアリングと1回目の作品交換を行った。

音楽学部の教室に全員集まり、作曲学生が今回自分で選んだ旧作の音源を流し、どのようなコンセプトで作曲した作品なのかプレゼンテーションを行った。その後、会場を陶磁棟に移し、陶磁学生の作品のプレゼンテーションを行った。3年生はこちらが指定した30個課題について、また、大学院生は卒業作品について紹介した。ここで、夏季休暇中の作品制作の際にもコンタクトが取れるように、ペア相手と連絡先を交換し質問や相談が相互に出来る体制を促した。また、作曲学生は、陶磁学生がいつでも聴き返せるように、作品音源をペア相手に渡し、陶磁学生は作品の一部を作曲学生に持ち帰らせた。このように事前交換した作品をもとに、それぞれが新たに展開した作品が、11月2週目の授業で発表される「課題1」である。

[2] 11月1日「陶磁学生のための作曲概論（担当：成本）」

音楽学部の教室にて、成本が担当して講義「陶磁学生のための作曲概論」を行った⁴。

[3] 11月10日「【課題1】の作品発表、プレゼンテーション」

この日は、夏休み前のプレ授業にて作品交換をした成果である「課題1」の作品発表、プレゼンテー

ションを行った（図2,3）。さらに、各ペアで質問や確認など、お互いに対話を行う時間を設けた（図4,5）。

そして、この日それぞれのペアの相手が発表した作品から再度インスピレーションを得て次の作品の制作にとりかかるのが「課題2」となる。



図2：制作した陶磁作品についてプレゼンテーションする学生と、それを聞く両専攻の学生たち（陶磁棟）



図3：作曲した作品についてプレゼンテーションする学生と、それを聞く両専攻の学生たち（音楽学部）



図4：各ペアでさらにお互いの作品について質問などの対話を行う



図5：各ペアでさらにお互いの作品について質問などの対話を行う（楽譜を使って説明するペア）

[4] 11月17日 作曲学生のための陶磁概論（担当：長井）

[2] の対となる講義「作曲学生のための陶磁概論」が長井によって陶磁棟にて行われた⁵。

[5] 12月1日「【課題2】の作品発表、プレゼンテーション」

課題1と同じく、それぞれ制作してきた作品の発表とプレゼンテーションを行った。課題1と大きく異なるのは、制作者が発想の源とするペア相手のその作品は、自分の作品を発想の源として作られたものであるということである。

課題2は、相手の作品に触れてからこの日までの期間が3週間しかないため、学生たちにとっては少々厳しい課題となる。普段の課題制作とは違い、集中的に短い時間での制作を経験することにより得るものもあるだろうと考えた。

この日の発表方法は課題1の時とは変え、すべての作品のプレゼンテーションを陶磁棟で行った。



図6：ペアでプレゼンテーションする学生

また、前回のように、まずは陶磁作品のみ、次は作曲作品のみでの発表とはせず、陶磁学生がプレゼンテーションし、次に、そのペアの相手である作曲学生がプレゼンテーションするという、ペア単位での発表を行なった(図6)。プレゼンテーション自体も、よく準備されているものが多く、プレ授業の時と比較すると、プレゼンテーションの質が向上している学生も多かった。

[6] 12月8日「作品発表方法について話し合い」

作品が出揃ったため、どのように発表すべきか話し合われた。当初は、2月に学内のどこかで成果発表をと考えていたが、それぞれの専攻の学期末の課題に取り組む時期にさしかかることや、春休みに入ってしまったら、せっかく成果発表会を開いても、見に来てもらえない、聴きに来てもらえないという可能性もあるため、別の日程を検討することとなった。また、成果発表の場所は、可能ならば、大学内の芸術資料館で行い、その資料館の中で、各作曲学生の曲を1曲ずつ演奏するコンサートも実施するという計画をたてた。その際のフライヤー作成などは陶磁学生が担当することとなった。

4. 制作された作品について

前述した授業の流れのなかで、実際にどのような作品が生まれたのかを記す。例として1組のペアによる作品解説を掲載する(表3)。

表3：ペアで作成した作品とその解説の例⁶

| | ブレ授業で提示した作品 | 課題1 | 課題2 |
|----------------|--|--|---|
| 男澤果林 (陶磁3年) | 陶磁作品A：30個課題 | 陶磁作品B：作曲学生・村瀬有咲の作曲作品Aをもとに制作された作品 | 陶磁作品C：作曲学生・村瀬有咲の作曲作品Bをもとに制作された作品 |
| | 『inside ↔ outside』  | 『Phantom's piece』  | 『Hidden sound』  |
| | 円柱の内側に、目には見えないエネルギーが発生した。そのエネルギーは絶えずごめきながら、外へ向かって形を変化させていく。柔らかいものから張りがあるものへ、動きとともに質感も変化していく。 私は、ものの内と外の関係性に興味を惹かれることがよくある。 | 村瀬さんの作曲した曲『Orbis』の虚無感の中にある、かすかな存在感を制作の足掛かりとした。 ー「生と死は人間が勝手に区別しているだけであって、生も死も存在しないのかもしれない。この世のすべては虚像かもしれない。」ーこれらは死生観につながることであり、今はまだはっきりと断言できるものではないが、自分自身や鑑賞者に問いかける作品にしたい。 (※作品名 Phantom は「実体のないもの」「幻」「目に見えず知覚の中でしか存在しない」という意味で用いている。) | 村瀬さんの作曲した曲『Gradation』を聴いた第一印象である、球体は見えないけれど感じるという要素、さらにそれらが動いて互いにぶつかり合っている、という感覚的なものを作品に落とし込んだ。ミニマル・ミュージックの安定かつ不安定な感覚を与える音の羅列は、まるで流れている水に少しの違和感が生じるようなものであった。 |
| 村瀬有咲 (作曲3年) | 作曲作品A (旧作) | 作曲作品B：陶磁学生・男澤果林の陶磁作品Aをもとに制作された作品 | 作曲作品C：陶磁学生・男澤果林の陶磁作品Bをもとに制作された作品 |
| | 『Orbis』(合唱) | 『Gradation』(2 Vibraphones) | 『鏡』(声楽アンサンブル) |
| | 「死」を想像する時、何を思い浮かべるだろう。最初は否定的な印象を持つのではないだろうか。しかし、命あるものは必ず死ぬ。花や虫が死ぬと、それは土に還り大地の栄養分となる。それが繰り返し行われ、大地が循環する。誰かがどこかで死んだ時、どこかで新たな命が誕生している。こうして生命は循環する。私は、「循環」をキーワードに作曲した。「Orbis」とはラテン語で循環を意味する。生死とは何か、私が作曲する上で考えたこれらのことを少しでも感じて頂けたらありがたい。 | 男澤さんの30個課題を元に作曲した。円柱の粘土が面影を残しながら徐々に形を変えていく様子をミニマル・ミュージックで表現した。ミニマル・ミュージックとは、音の動きを最小限に抑え、パターン化された音型を反復させる音楽を言う。同じ音型を反復させていく中で一部分を少しだけずらしていくと、音型が面影を残しながら変化していく。この変化を2台のヴィブラフォンで表現した。少しのズレがいつの間にか大きなズレになり全体が大きく変化するように聴こえる。この曲では徐々に形を変えていく目に見えない音の“グラデーション”を表している。 | 男澤さんの『Phantom's piece』という作品を元に作曲した。この作品では、鏡が世界観を作り出す重要なアイテムだと感じた。男澤さんの作品を見てから鏡に不思議なものを感じ始めた。鏡をじっと見ていると、これは本当に私なのかとおかしな感覚に陥ることがある。本当の自分はどっちなのか、はたまたどちらでもないのか。この現象を大まかな曲の構造として作曲した。 |

表3は、制作した学生が自分で記した作品解説と、陶磁作品の写真である。それぞれがどのように影響を受けたのかがよくわかる。

この合同授業では、両専攻とも最後にレポートを課した。そこからも、学生たちが普段の制作と違う方法を、試行錯誤しながら行ってきた様子うかがえる。前述の通り、この課題の作成中はお互いコンタクトを密にとることも推奨したが、実際に作曲の学生が陶磁棟を何度も訪れ、また、何回もメールのやりとりをするなどして、自分の制作の発達の源となる作品について深く切り込んでいった様子もうかがえた。さらに、これまでの創作時には持たなかった新たな視点を持つことができた様子も伝わってくる。以下に学生の許可を得て一部引用する。

・陶磁学生のレポートより

「印象に残った経験の1つは、感覚を耳に集中することである。普段の制作では目と手の感覚に集中しており、聴覚は重要に思えていなかった。しかしこの課題の中で、曲を深く聞こうと耳を凝らす時が何度もあり、数を重ねるごとに音の魅力を感じるようになってきた。聴覚も五感の中の重要な感覚の一つであるということを実感した。」

「(ペアの相手が)制作した楽譜に向き合う中で、私自身の色や質感に対する思いの変化があった」

「(ペアの相手から)『この作品にはいくつか疑問点がある』というコメントをいただいたが、その中で『誰が袋に卵のからを詰めたのか⁷』というものがあった。この意見はとても興味深いと感じた。普段自分の作品を考える際に、作品の外に存在する第三者のことを考えたことがなかったからである」

・作曲学生のレポートより

「互いのジャンルへの理解が深いわけでもなかったのですが、非常に解釈が難しかった。そこでお互いの作品に対する想いを言葉で交換することで大きなヒントを得ることができた」

「視覚的表現を聴覚的表現に移動する体験の中で、見たまま、感じたまま表現するのか、相手の作品制作の意図を知って表現するのかでは、大きく制作される作品の印象が変わることが私の中で1番の学びと経験だった」

「目に見えるものを音楽という目に見えないもので表現するにあたって、作品の中からほんの少しの音楽的要素を見つけ出し、それを拡大して組み立てて、新たな作品として生まれ変わらせるという一連の流れを生み出すことが出来た」

「自分の作品からインスピレーションを受けた作品が生まれる、という体験もでき、自分の作品がどのような印象を持たれるのかという、客観的な視点を見ることができた」

さらに、「いつもと違う脳の部位を使って制作した」という感想も聞かれ、これまでにない創作のプロセスの体験となったことがうかがえた。

5. 成果発表展 / 成果発表演奏会

成果発表は授業実施から年度をまたいで開催となるため、新年度に入ってからできるだけ早く行うことを検討した結果、4月に新学期が始まって2週目に行うこととなった。演奏会については、実際の陶磁作品の前でそこからインスパイアされた作品の演奏ができることから、展覧会と演奏会の同一会場での開催を芸術資料館内で計画していた。しかし、コロナ対策下の資料館の入場制限により、演奏会時の入場者数は出演者だけで上限に達することが判明した。そのため、演奏会は同じく学内にある室内楽ホールにて行うこととなった。スケジュールは以下の通りである。

4月18日：搬入

4月19日～21日：展覧会（芸術資料館）

4月19日：演奏会（室内楽ホール）

4月22日：搬出

成果発表に向けて、フライヤー・ポスターデザイン、展覧会場内に設置する作品説明、解説、キャプションなどは陶磁専攻の学生達が作成を担当した。また、展覧会場内で作曲作品を流すための方法は、作曲コース准教授安野太郎の協力を得て、mp3プレーヤーにより各ブースにて全作品の音源を流すことにした。

5週間の合同授業の課題自体はすでに終了していたが、ここから成果発表会までの期間が、結果的に「美術と音楽のイベント実現」へのプロセスを経験する貴重な実習となった。陶磁学生、作曲学生それぞれにとって、当たり前で説明不要の事柄であっても、相手には全く未知のことも多く、それ自体が各分野の普段の制作が、いかに狭い世界における共通理解の上に成立しているのかを相互に学ぶ機会となったようであった。

陶磁学生は、4月の展覧会を目指し、課題終了後も制作を継続し、大型作品は長期乾燥を経て、最終的に全展示作品の本焼成が終了したのは3月であった。

一方で、作曲学生は、コンサートのための演奏者依頼とリハーサルに取り掛かった。また、資料館内で流す音源の録音も行なわれた。音楽学部職員で録音担当の平田耕一の協力を得て、器楽作品は室内楽ホールにて数日にわたって録音された。声楽アンサンブルの作品は新型コロナウイルス感染を避けるため、録音スタジオにて演奏者1人ずつ録音し、多重録音で対応した。また、プレ授業にて用意した旧作について、録音の状態が良くなかったものはこの機会に再録音した。コンサートは時間的な制約もあり、課題で作曲した作品から1曲のみ演奏することにした。

展覧会のパンフレット作成は陶磁の学生が担当し、展覧会当日配布するパンフレットとしても使用できる形で作られた。表1で示したようにこの課題では創作の連鎖が、文字通り鎖のようにクロスしていく。そこにある（そこで聴こえる）作品が、どの作品からインスピレーションを得たのかわかるように記すのに苦労していたが、最終的には図7、8のようなパンフレットが仕上がった。また陶磁学生により、この成果発表展／演奏会のタイトルは、互いが共鳴し響き合うというイメージから「resonancia」と名付けられた。



図7：パンフレット/表 (A2サイズ)

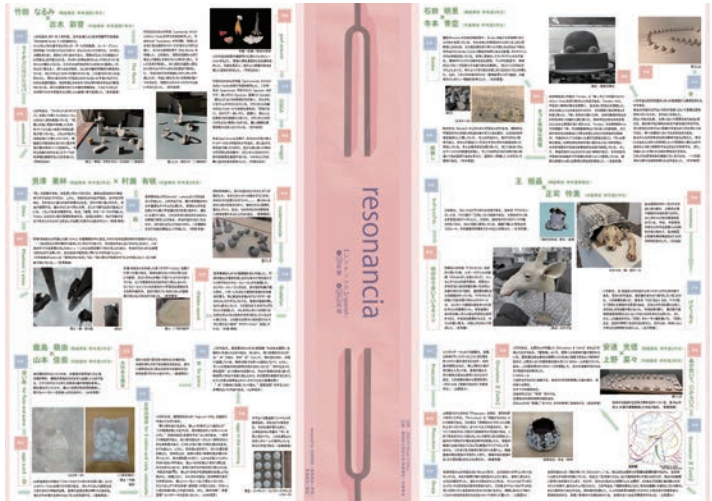


図8：パンフレット/裏・作品制作の順序と各作品の解説

芸術資料館の展覧会は、各ペアで一つのエリアを担当して、作品の展示とスピーカーの位置等を連携して決めた。また、資料館最奥の展示エリアは、他から離れて一つの部屋のように使用できるため、オブザーバーとして参加していた大学院生2人が、演出等も含め自由に空間を作り出すことにした(図9)。

搬入は全員で作業を行なった。主に、陶磁学生は陶磁作品の設置、作曲学生はスピーカーの位置や音量の調節等を行なった。各ペアでブースが決められているので、その中での配置の仕方は教員2人の指導とアドバイスのもと、ペアの学生2人で設置していった(図10、11)。また、図12、13は資料館内の展示の様子である。



図9：大学院生のブース



図10：陶磁と作曲の学生による展示準備



図11：左から作品解説、スピーカー、陶磁作品



図12：芸術資料館内の展示(1)



図13：芸術資料館内の展示(2)

演奏会は、実際の陶磁作品の前で演奏ができるため資料館での開催を計画したが、前述の通り開催は難しく、室内楽ホールを使用することとなった。その場合、どのような陶磁作品から作曲された作品なのかがわかりにくいいため、配布する作品解説の中で写真を使って示すこととした（図14）。演奏会は、陶磁学生にとって、録音のみで聴いていた作品を、実際の演奏で聴く機会となった。自分の作品をもとに作曲された作品を実際の演奏会で聴くというのは初めての体験となった学生がほとんどであり、得難い体験となった。

展覧会、演奏会ともに、コロナ対策のため、学内限定公開であった。展覧会は3日間で189名の来場者があり、演奏会は80席限定のところ満席となり、急遽職員や教員が外に出たりすることで凌いだ。「多くの来場者に自分の作品を観ていただく、聴いていただくことになり、嬉しかった」と話した学生も数名いた。



図 14：コンサートで配布した作品解説（一部）

6. おわりに

この合同授業は今後数年にわたり継続する予定である。まとめとともに、今後のために様々な課題についても述べておく。

同授業は、陶磁専攻で新たに開講した芸術表現コース（2021～）の独自の教育方針を示す、実験的な試みでもあった。同コースの学生たちが、これまで参考としてきた視覚中心の作品ではなく、聴覚に訴え、また時間を伴う表現である作曲作品と向き合い、その異分野の作家と対話し、そこから着想を得てどのように創作に繋げることが出来るのかは全く未知数であり、指導する側としては期待と共に内心若干の不安のもとで課題を進めたが、成果は予想を見事に超えてくれた。この授業の陶磁創作では、「これまでの陶磁課題では感じたことのない脳内分野を酷使したような苦しさがあった」と、学生たちは口を揃えた。この苦しさは創作プロセスにおける内面的な成長の証ではなかったかと、手応えを感じている。陶磁の創作分野は、伝統工芸やデザイン等、様々なジャンルで過去50年の枠組みから大きな飛躍を遂げるべき転換期にあると考える。このような異分野とのコラボレーションや既存概念の破壊を通じて、柔軟な視野と視座を獲得しながら、私たち教員も予想だにしない未来を、学生たちが形作って行くことを期待している。

初年度はたまたま陶磁学生と作曲学生の人数が同じであったため、ペアを組んでの制作という方法がとれたが、お互いの専攻で毎年必ずしも同人数であるとは限らず、人数に偏りがあった場合はどうするのかということについては、考えておく必要があるだろう。

作曲コースでは、課題2の制作期間が短く、作曲作品は実際の演奏音源を用意するのは難しいと考え、コンピューターによる打ち込みのデモ音源も可としたが、実際作曲された作品の中には、各楽器の特殊奏法が含まれていた曲もあり、その再現は難しく、デモ音源も作れないということがあ

た。また、作曲学生はパソコンの音源でも実際の楽器の音を想像し、頭の中で変換しながら聴くことが可能だったが、陶磁の学生は渡された音源の音色も含めて、作品そのものとして聴いてしまうということがあり、これはデモ音源作成において改善すべき点である⁸。

今回陶磁、作曲両専攻が連携して実施した令和3年度の取り組みは、本学初の正式な合同授業としてオリジナルな課題内容が学内外でも評価されたが、今後同じ授業形式を繰り返すことは、授業の魅力と学びの本質を希薄にする危険があると考えている。そもそも授業を企画した指導教員自身にも、取り組む学生たちにも予測できない未知の可能性とそれに伴う期待感が、新展開を促すエンジンとなっていた。結果的に実現した展覧会や演奏会も、学生オリジナルのポスター・フライヤーのデザイン制作も、当初から計画していたものではなく、教員と学生たちの盛り上がりによって達成された成果なのである。我々指導教員2人にとって何より思いがけなかったのは、異分野の創作者である陶磁と作曲の学生同士がこれほど共感し合いながら共同作業を実現できたことである。陶磁分野では、基礎教育である発想・造形・技術を前提に、学生個々の幅広い教養の獲得と探究心が独創的な表現へと導いていく。独創への手がかりとして、内面との対話だけでなく、常に未知との格闘と未知への開拓という課題を仕組むことを今後のテーマとして、この連携授業を進化させていかなければならないと考えている。

この原稿を執筆している時点では、すでに令和4年度のプレ授業が終わり、合同授業がもうすぐ始まるというタイミングである。2年目となる令和4年度には、美術学部芸術学専攻准教授金子智太郎、メディア映像専攻スタジオスタッフ上山朋子の両名に依頼し、2週間にわたるフィールドレコーディング・ワークショップ「霜月に岩作三ヶ峯の音に入る」の合同授業内での開催が決定している。

もともと、お互いの領域に関心を持っていた長井と成本が「何か一緒にやれないか」と探り始め実現した授業であるが、振り返ってみると、当初思い描いた以上の成果があったと考えている。学生の中には、ペアの相手と気が合って友情が生まれ、課題終了後も学外で一緒に企画を行うペアもあり、これは嬉しい出来事であった。

前述のように、本学は同じ敷地内に美術学部、音楽学部が併存する「芸術大学」であり、学生だけでなく、教員同士の交流が非常に容易な環境にある。これらの条件を最大限活かしながら、単独研究では発想できないような作品創作を促す授業運営を、今後も協力しながら継続していきたいと考えている。

註

- ¹ 「陶磁の学生が、簡単な作曲を試みる」「作曲の学生が、実際に粘土を使って陶磁の初歩を学ぶ」「陶磁の学生と作曲の学生がペアになって一緒に1つの作品を作り上げる」など。
- ² 演奏者の行為を中心に計画される、演劇的要素と音楽的要素が混じり合った音楽作品。
- ³ 大学院生は、音楽をテーマに製作した卒業作品を用意した。
- ⁴ 対象は陶磁学生のみで、作曲学生は参加しない。
- ⁵ 対象は作曲学生のみで、陶磁学生は参加しない。
- ⁶ 表3は、後述の成果発表展にて設置したボードに書かれた作品説明と写真(図10左)から転載した。
- ⁷ ここで制作された陶磁作品は、「卵の殻」で、それをオーガンジーの布をミシンで縫製した袋に詰めた形で提示された。
- ⁸ 翌年度(令和4年度)は、エレクトロニクス作品以外は極力実際に録音するというルールに変更している

執筆者

成本 理香(音楽学部作曲専攻作曲コース 准教授)

長井 千春(美術学部陶磁専攻 教授)